



Title	フランス語の複合過去に関する一考察：出来事の展開における変化と主観性
Author(s)	安西，記世子
Citation	大阪大学言語文化学. 2007, 16, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77865
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス語の複合過去に関する一考察

—出来事の展開における変化と主観性—*

安西 記世子**

キーワード：完了、変化、主観性

Dans le paradigme du verbe temporel français moderne, le passé composé assume deux emplois : une valeur de temps passé et une valeur d'aspect accompli.

En français parlé, le passé composé a supplanté le passé simple, qui est réservé à la langue écrite, et exprime un événement passé que l'on saisit dans sa totalité. En français écrit, les deux formes sont concurremment employées, bien que le passé composé prenne progressivement la place du passé simple. Il faut donc trouver les fonctions spécifiques à chaque temps verbal, passé simple et passé composé, dans la langue écrite.

Il est largement admis que le passé simple est employé pour décrire un événement d'un point de vue objectif ; que le passé composé est employé, en revanche, pour décrire un événement d'un point de vue subjectif.

Si l'on admet que le passé composé est employé pour exprimer un événement passé en le saisissant subjectivement, on peut dire que c'est la raison pour laquelle il concurrence le passé simple dans la langue écrite.

Dans cette étude, nous avançons deux hypothèses suivantes : (1) le passé simple exprime le fait sans le rapporter à un moment ; à savoir il n'a pas de repère temporel auquel renvoie le fait, mais ce dernier même est indépendant de nature pour se figurer dans la narration. Ainsi, le passé simple a-t-il une valeur unique de marquer « un fait existant » dans le contexte quel qu'il soit, sans représenter la consitution temporelle inhérente au procès, ni renvoyer à un repère temporel. (2) le passé composé exprime un procès qui renvoie à l'étape précédant son achèvement et se rapporte à un autre procès qui s'est déjà produit.

La subjectivité du passé composé ne découle pas seulement de sa fonction principale, mais elle est renforcée lorsque le passé composé est mis en contraste avec le passé simple. À la différence du passé simple ne pouvant pas, nous le croyons, exprimer un procès qui

* Une étude sur le passé composé en français

—Une mise en relief du déroulement des événements par rapport à la subjectivité du passé composé — (ANZAI Kiyoko)

** 大阪大学大学教育実践センター非常勤講師

se développe suivant le temps mobile, du passé au futur, le passé composé peut faire ressortir un procès passé parmi des événements écrits et c'est ainsi que le passé composé marque un sens subjectif dans un contexte concret.

1 はじめに

フランス語の時制形式の一つである複合過去形（以下、複合過去）は、他動詞と大部分の自動詞は、動詞 avoir（持っている）の現在形と過去分詞からなり、一部の自動詞は、動詞 être（ある、いる）の現在形と過去分詞からなる。

多くの先行研究において、複合過去はテンスとして過去を表す価値を持ち、アスペクトとして完了¹⁾を表す価値を持つことが指摘されている。典型例を挙げる。

(1) Il **a plu** hier toute la journée. (過去)「昨日は一日中雨が降った」

(2) Quand il **est rentré**, je te ferai signe. (完了)「彼が戻ってきたら、君に知らせるよ」

現代フランス語では、会話（話し言葉）において単純過去形（以下、単純過去）の代わりに用いられる。この場合、過去の事行をひとまとまりに捉えて表す単純過去の機能を代用している。単純過去は語り（書き言葉）でのみ用いられる時制である。単純過去と複合過去が共起する語りにおいては、この二つの時制形式は異なる機能を持つと考えられる。本稿では、語りにおける二つの時制形式の対比的な観察を通して、複合過去の主観性について考える。2で単純過去の主な機能について考察し、3で単純過去と対比しながら複合過去の機能と主観性について考えていく。

2 単純過去が構成する時間的空間

従来の研究で、単純過去は現在と断絶した「過去」の動作や状態などを表すとされている。アスペクティックな価値としては、動作や状態などをひとまとまりに点として表し、それらに内在する過程のどの局面にも焦点をあてない。Vassant (1977) は、下の文章を例に挙げて、単純過去を用いた語りは等質的な調子を生み出すとしている。

(3) « Le commissaire se leva et, sur la pointe des pieds, courut fermer la porte. Il se retourna, le doigt sur la bouche. Puis il leva les bras au ciel. Il esquissa toute une mimique de désespoir. Puis il rit. » R. Vailland, La loi, N.R.F., 1957, p.41-42 (Vassant による引用)

¹⁾ 過去の事態の結果としての現在の状態、現在まで継続している事態、現在までの経験なども表す。

(下線も含む), p.291)

下線を引いた単純過去の動詞は、「立ち上がった」、「走って行って閉めた」、「振り返った」、「上げた」、「わずかに示した」、「笑った」という動作を表している。各々の動作は点のように捉えられ、その連続により動作の継起性ひいては出来事の展開が解釈として出てくる。このことは単純過去のアスペクト的な価値は共に用いられる副詞的な語句をみても確認できる。(太字イタリック体は単純過去)

(4) Le froid **fut** intense pendant une semaine. À la fin du huitième jour, il **fit** plus doux et la neige tomba. Cela **dura** toute la nuit. Au matin, le marais n'était plus que blancheur. (*Les enfants du marais*, p.269)

(5) Le miracle **s'accomplit** le dernier jour de février : l'hiver **céda** brusquement. Cela **se fit** en une journée. Au matin, il gelait ; puis, vers dix heures, une brise du sud **courut** un moment et les roseaux **parurent** sortir de leur torpeur. (*Les enfants du marais*, p.287)

下線を引いた語句はすべて時間的な限界を表す (pendant une semaine (一週間のあいだ)、À la fin du huitième jour (8日目の終わりに)、toute la nuit (夜通し)、le dernier jour de février (2月末に)、en une journée (一日で)、brusquement (突然)、un moment (つかの間))。

筆者は、単純過去は、フランス語の時制形が表す「過去—現在—未来」の3区分に基づく「時間」とは別の価値を持つと考える。なぜなら、単純過去は時間軸上のどの時点も基準とせず、それ自体が独立して語りの場面に「事実」を記すと考えられるからである。単純過去が年号などの時間表現と共に用いられて、事実が一時点に位置づけられることもあるが、その場合は、時間表現によって語彙的に示された時点にその事実が固定されるだけである。事行のアスペクトに関わる価値についても、単純過去は事行内部のいかなる局面(始点、途中段階、終点)にも関与せず、全体をひとまとまりに表す。以上のことから単純過去の価値を次のように提案する。

(6) 仮説1：単純過去は個々の事実を語りの場面に記し、時間的基準点を持たない。

例文(3)について指摘したように、単純過去を連続して用いると時間の流れに沿って出来事が展開しているかのような解釈がでてくるだけであり、個々の事行は独立して語

りの場面に記されるだけである。このような価値によって、単純過去は客観的事実の記述に適しているといえることができる。

3 複合過去の主観性

複合過去は、(6)で提案した単純過去の価値とは異なり、現在を基準として回想された過去の動作や状態を表し、フランス語の時制形の表す「過去－現在－未来」を軸として構成される時間に関わる。

動詞が表す動作、移動、作用、現象、状態、状態変化、認識、感情などを「事行」と呼ぶ。事行そのものの時間的特徴（動詞の語彙アスペクト）は、一定の時間にわたってある事行が持続すると捉えるのか（状態動詞などの場合）、あるいは瞬間的に成立すると捉えるのか（例として「着く」という動詞の場合）、という事行成立に要する時間認識の違いをはじめ、いくつかの意味的な基準によって決まる。一方、時制形にも固有の時間的特徴（文法アスペクト）があり、文において時制形をとる動詞は、動詞の語彙アスペクトと時制形の文法アスペクトが合わさった意味を表す。たとえば、フランス語の「出かける」という動詞 *sortir* の複合過去形の文 « il est sorti. »（彼は出かけた）には、不定詞 *sortir* が示す事行成立に不可欠な瞬間（出る瞬間）と複合過去形の現在完了的な意味が含まれる。したがって、ひとつの解釈として、この文は「彼は（出かけて今は）いない」という過去の行為の結果として現在認識できる状態を述べている文であるとみなすこともできる。本稿では、時制形をとる動詞が表すことがらを「事行」とよぶ。異なる事行は順番に起こることもあれば、ある事行が持続している間に別の事行が起こることもあり、いくつかの事行が時間的、意味的に関連し合い、ひとつの「出来事」を構成していると考えられる。出来事が時間の経過とともに推移していくことを「出来事の展開」と呼ぶ。出来事の展開を語る上で、ある事行が完了することもある、持続していることもあり、場合によっては、まだ実現していない事行が実現するものとして前もって示されることもある。このように「事行」と「出来事」ということばを区別した上で、複合過去は時間の経過とともに展開していく出来事に含まれる一つの事行の完了を表す、といえることができる。

以下では、単純過去と複合過去の対比を通して、語りにおける複合過去の機能と主観性について考えていく。

3. 1 場面に固定した静的な事行と出来事の展開における新たな局面

アルベール・カミュの「異邦人」は、単純過去はほとんど用いられず、複合過去で書かれた小説として有名である。全体を通して単純過去は7回しか用いられていない（cf.

Wilmet (1997, pp.369-370))。本稿では、そのうちの4つをとりあげ、単純過去と複合過去の違いについて考察する。(以下では、どちらも太字イタリック体で示し、複合過去にはさらに下線を引く)

(7) J'ai réfléchi et précisé que j'avais tiré une seule fois d'abord et, après quelques secondes, les quatre autres coups. « Pourquoi avez-vous attendu entre le premier et le second coup ? » dit-il alors. Une fois de plus, j'ai revu la plage rouge et j'ai senti sur mon front la brûlure du soleil. (p.106)

ここでは、殺人犯 (je (j)「私」) が予審判事 (il「彼」) の尋問に答えている場面が描かれている。Wilmet によると、判事の問い返しのことばを示した直接話法の文 (« » 内) の直後の単純過去 dit ((と)言った) は、現在形と同音異義でかなり慣用的な形として用いられている²⁾ (p.370)。また主語の人称も異なる。単純過去の動詞(発話動詞)の主語は³⁾ 人称 il であるのに対して、複合過去の動詞の主語は1人称であり、動詞は思考、確定、知覚 (ai réfléchi (よく考えた)、ai précisé (はっきり述べた)、ai revu (思い浮かべた)、ai senti (感じた)) を表している。

(6)に照らし合わせて単純過去の用法をみると、括弧の中の直接話法の文は、語りにおいて出来事が描かれている過去とは別の時間(=現在)を設定している。その後の単純過去 dit は、直接話法の現在形の発話を語りの場面に固定する働きをもっていると考えられる。接続詞 alors (その時)は、現在形の文を単純過去が示す語りの場面に結び付けている。

複合過去と半過去(基本的価値=未完了)を基調とするこの小説では、複合過去はテンシ的に単純過去の機能を兼ねているが、(7)の単純過去 dit は、主人公の思考、感覚を中心とする出来事の回想から外れる行為を示すために用いられている。

次に、複合過去が動作の完了を表し、その動作に続く感覚を単純過去が表している場合について考えてみたい。

(8) Quand je suis entré, le bruit des voix qui rebondissaient contre les grands murs nus de la salle, la lumière crue qui coulait du ciel sur les vitres et rejaillissait dans la salle, me causèrent une sorte d'étourdissement. (p.115)³⁾

²⁾ riposte du juge d'instruction, plus homophonie au présent et forme passablement figée.

³⁾ 訳「なかへ入ってゆくと、この部屋の広い裸の壁にはねかえる人声のざわめきと、空から窓ガラスへと降りそそぎ、広間にほとばしる、あらあらしいひかりのために、私は何かめまいのようなものを感じた。」(「異邦人」窪田啓作訳(新潮文庫), p.76 / 太字イタリック体および下線は筆者による。(8)の原文の印に対応。)

複合過去の動詞 *suis entre* (入った) は、接続詞 *quand* (～の時、～すると) と共に用いられて、事行の完了を表している⁴⁾。それと対比的に、半過去を用いて部屋の様子が描写され、単純過去を用いて主人公が受けた感覚が表されている。単純過去と感覚的および心理的反応⁵⁾を表す事行について、春木(2005)は、単純過去はコントロール不可能な事行を表すと指摘している⁶⁾。この考えに依拠して、コントロール不可能な事行は意図性かなり低いため、そこに関わる主体や対象となる人の物理的、心的状態を表すことが多いと考え、(8)では、単純過去はその場面における感覚的な状態を描くために用いられているといえる。それに対して、複合過去は人物の移動という一種の変化を表すために用いられている。つまり、単純過去が過去の場面に固定した対象の状態を表すのに対して、複合過去は出来事が展開する時間における動作の完了を表しているのである。

次の例においては、主人公が受けた印象を語るのに単純過去が用いられ、主人公の認識と第3者の動作を語るのに複合過去が用いられている。

(9) *Devant la porte, il y avait la voiture. Vernie, oblongue et brillante, elle faisait penser à un plumier. A côté d'elle, il y avait l'ordonnateur, petit homme aux habits ridicules, et un vieillard à l'allure empruntée. J'**ai compris** que c'était M. Pérez. Il avait un feutre mou à la calotte ronde et aux ailes larges (il l'**a ôté** quand la bière **a passé** la porte), un costume dont le pantalon tire-bouchonnait sur les souliers et un nœud d'étoffe noire trop petit pour sa chemise à grand col blanc. Ses lèvres tremblaient au-dessous d'un nez truffé de points noirs. Ses cheveux blancs assez fins laissaient passer de curieuses oreilles ballantes et mal ourlées dont la couleur rouge sang dans ce visage blafard me **frappa**. L'ordonnateur nous **donna** nos places. Le curé marchait en avant, puis la voiture. (p.26)*

複合過去の動詞 (*J'*) *ai compris* ((私は)わかった), (*il l'*) *a ôté* ((彼はそれを)脱いだ) は、認識と意図的行為を表し、接続詞 *quand* (～のとき) 節の (*la bière*) *a passé* ((瓶が)通った) は *a ôté* に対する完了を表している。いずれも出来事の展開や推移を表す時間に属する事行である。一方、二つの単純過去 (*frappa* と *donna*) が表す行為は、出来事展開を表す時間に含まれる事行ではない。

⁴⁾ 春木(1993)に *quand*+ 複合過去の非時間的完了の用法の説明がある。(p.143)

⁵⁾ 春木(2005)「外部世界の事態(第三者の行動や言動)が原因となって語り手に引き起こされる感覚的反応や心理的反応は単純過去で書かれている。」(p.4)

⁶⁾ 春木(2005)「語り手にとって受動的な出来事、また、語り手が関わっていても、語り手がコントロールできない偶発的な出来事や外部にその事態が発生する原因が或る事態は、単純過去で書かれている。」(p.3)

Wilmet (1997) は一つ目の単純過去 *frappa* (～に強い印象を与えた) の用法を「より生き生きとした反応」(*réactions plus vives*, p. 370) ということばで説明している。また、次の *donna* (与えた) は *frappa* につられて単純過去が用いられたとみなしている。
(*donna entraîné par la contagion de frappa*) (p.370)

よく知られていることとして、単純過去は事行を点的に表すのに対して、半過去は基本的に事行の始まりと終わりを問題にせず持続した動作や状態を表す。この意味的対立により単純過去と半過去は語りの前景と背景を構成することが多い。この文では、半過去によってある人物の特徴が詳細に描かれ、その特徴に対する「私」の心理的反応が単純過去 *frappa* で表されている。つまり、半過去と単純過去はそれぞれ、語りの場面の情景と行為を描いている。このように単純過去は、複合過去が担う出来事展開の時間を一旦止めて、眼前の様子を描いた「場面」に属する行為を示している。

それに対し、(9)と同じ文 (*Devant la porte, il y avait*) で始まる次の一節において、複合過去は出来事の展開を表している。

(10) *Devant la porte, il y avait* une dame que je ne connaissais pas : « M. Meursault », a dit le directeur. Je n'ai pas entendu le nom de cette dame et *j'ai compris* seulement *qu'elle* était infirmière déléguée. Elle a incliné sans un sourire son visage osseux et long. Puis nous nous sommes rangés pour laisser passer le corps. Nous avons suivi les porteurs et nous sommes sortis de l'asile. (p.25)

太字イタリック体で示した部分⁷⁾は、(9)と類似しているが、その後の部分で複合過去(下線部)が用いられ、「彼女は～を傾けてお辞儀した」、「それから私たちは並んだ」という出来事展開の時間軸に沿った継起的な動作を表している。

3. 2 出来事の展開において複合過去が表す変化と主観性

ここでは、出来事の展開に複合過去がどのような変化を示しているかみていく。次の例では、同じ動詞 *dessiner* (描く) に複合過去と単純過去が用いられている。

(11) (...) Et je fus stupéfait d'entendre le petit bonhomme me répondre :
«Non ! Non ! Je ne veux pas d'un éléphant dans un boa. Un boa c'est très dangereux, et un éléphant c'est très encombrant. Chez moi c'est tout petit. J'ai besoin d'un mouton. Dessine-moi un

⁷⁾ Devant la porte, il y avait.... 「扉の前には～がいた (あった)」 / J'ai compris que 「私は～とわかった」

mouton.»

Alors j'ai dessiné.

Il regarda attentivement, puis :

«Non ! Celui-là est déjà très malade. Fais-en un autre.»

Je dessinai :

Mon ami sourit gentiment, avec indulgence : (*Le Petit Prince*, p.18)⁸⁾

下線を引いた直接話法では羊の絵を描いてほしいと頼んでいることが述べられている。最初の太字イタリック体は（「そこで私は描いた（描いてあげた）」）は複合過去で書かれている。次いで絵の描き直しが求められ、2 番目の太字イタリック体の「私は描いた」という文につながる。この文は単純過去で書かれ、最初のイタリック体と同様に「描いた」と訳することができる。

Leeman (1994)⁹⁾ は、二つの時制形式の違いを文脈の中で解釈しなおし、複合過去から単純過去への移行をおおむね次のように説明している。助動詞が現在形をとる複合過去は現在と結びついた完了または過去の事行を述べるために用いられるのに対して、単純過去は現在と断絶した過去の事行を述べるために用いられる。(11) では、直接話法が示す現在¹⁰⁾ の文によって求められた行為の達成を表す複合過去は、意図的に（積極的に描いてあげようとして）描いたことを表すのに対して、2 回目に用いられた動詞 *dessiner* の単純過去は、やや苛立って相手と心的な距離を置いて絵を描いたことを表している。

春木 (2002) では、Franckel (1989) のアспект研究¹¹⁾ における複合過去論を拠所として、複合過去 *ai dessiné* は限界達成を表すとしている。下に分析の詳細を引用する。

「最初の複合過去の *j'ai dessiné* は、何も描かれていない状態から羊が描かれた状態への変化を捉えた表現であり、限界達成を表す複合過去である。(…) 一方、単純過去の *je dessinai* は、一つ目の羊の絵に続いて二つ目の羊を描いたという継起的事行を報告して

⁸⁾ 出版社 Gallimard, Paris, 1999 年刊行。例文 (12) も同じ本より引用。

⁹⁾ Une analyse stylistique ponctuelle (c'est-à-dire valant pour ce passage) pourrait s'appuyer sur le fait que, dans le premier cas, *alors* relie explicitement le passé composé à la demande du Petit Prince (au présent puisqu'il s'agit de discours direct : on cite ses propres paroles) : l'aviateur se prête au jeu avec bonne volonté. Mais l'insatisfaction de l'enfant l'agace peut-être un peu, ce que marque la distance établie par le passé simple dans le deuxième cas (et dans les autres, car l'exigence du Petit Prince ne s'arrêtent pas là). (Touratier (1996) による引用, p.151)

¹⁰⁾ 筆者が個人的に文面で Leeman 氏に対して、「直接話法の引用文の箇所ですり手の介入があり、すり手の現在との結びつきを複合過去が表していると考えているのか」、という質問をしたところ、すり手の介入についてはコメントを控えた返答を得た。(2006 年 1 月電子メールによる対話から)

¹¹⁾ Franckel, J.-J (1989) : Étude de quelques marqueurs aspectuels du français. Genève : Droz.

いるだけである。つまり、まだ羊の絵が一つも描かれていない状態においては、登場人物の星の王子様や読者に、絵を描いてくれるのかどうか、絵が描かれるのかどうかという不安感や期待感がある。つまり、前提（＝限界）が構築され、その前提が満たされるのかどうか、限界が達成されるのかどうかという状況の中で発話されるが故に、複合過去がふさわしいのである。二つ目の羊の絵に対しても同じような状況があるのではないかという疑問が出てくるかもしれないが、主人公が（二つ目の）絵を描くことを嫌がっているとか、たとえばペンのインクがほとんど無いというような、行為の達成に困難が伴う状況があるのでなければ、ここは単なる行為の遂行を表現するだけで十分なのである。」（p.39）

上の2つの分析を出発点として複合過去の機能を再考すると、「」で示されたひとつめの直接話法は、単純過去を基調とした時間的空間から出て、一時的に現在を示している。複合過去はこの現在につながる事行の完了を表し、この事行の完了が、出来事の展開を語りに加える。このようにして、複合過去は出来事の展開に変化を示すことになる。ここで接続詞 *alors*（そこで）は、直接話法が示す現在と複合過去が表す事行の完了を意味的に結びつけると同時に、複合過去が表す出来事展開のための時間の概念を単純過去が表す場面に与える働きをしているといえる。つまり、複合過去は、前文脈まで単純過去で語られてきた事柄に関連して「描く」という行為の実現を表すことにより、出来事の展開を示している。

実例を観察すると、複合過去形は文脈内で既に述べられた事柄に関わる事行の完了を表していることが多い。筆者は、複合過去形は前文脈にある事行に意味的にむすびつく完了を表すと考え、(6)の仮説と関連する次の仮説をたてる。

- (12) 仮説2：複合過去形は単純過去が示す事実に関連する事行の完了を出来事が展開する時間に表す。

以下では、この仮説にもとづき複合過去の価値を観察してみたい。

- (12) Il me *fallut* longtemps pour comprendre d'où il venait. Le petit prince, qui me posait beaucoup de questions, ne semblait jamais entendre les miennes. Ce sont des mots prononcés par hasard qui, peu à peu, m'ont tout *révélé*. Ainsi, quand il *aperçut* pour la première fois mon avion (je ne dessinerai pas mon avion, c'est un dessin beaucoup trop compliqué pour moi) il me *demanda*: (*Le Petit Prince*, p.19)

太字イタリック体の単純過去は順番に「(時間が)かかった」、「見かけた」、「きいた (たずねた)」という意味を表す。下線を引いた現在形と複合過去は「たまたま口にだされたことばから、少しずつ、すべてのことが明らかになった」¹²⁾ という意味を表す。このように、複合過去は、前文脈に関連づけられて、出来事の展開における事行の実現を示している。

3. 3 現在完了的な用法と主観性¹³⁾

最後に現在完了的な意味で用いられた複合過去が出来事展開に変化を与える例を見ておきたい。次の一節において、複合過去は単純過去で語られた多くの事行をまとめる働きをしている。

(13) Lorsque je leur *expliquai* que j'étais sérieux, ils *se calmèrent*, presque... Peut-être était-ce une prière silencieuse de remerciement.

Ces deux cerises, *depuis, ont pris* une signification symbolique, comme deux minuscules miroirs réfléchissant la salle de spectacle. (spectacle de ballets William Forsyth)¹⁴⁾

太字イタリック体で示した最初の2つの動詞は「(～と)説明した(とき)、～は静まり返った」という意味を表し、時制形は単純過去である。この文の前の部分も単純過去と半過去で書かれ、最後に複合過去がそれまで語られてきた事行をまとめている。下線を引いた太字イタリック体の複合過去の動詞は「(それ以来、この二つのさくらんぼは象徴的な意味を)持った」と訳せるが、副詞 *depuis* (それ以来) とともに用いられて現在完了的な意味を表すと同時に、その前の段落までで語られてきた事実を現在から捉えなおし特徴づけをしている。いいかえると、複合過去は、客観的な対象として語られてきた事実に基づき事行の完了を現在の視点から述べるために用いられている。つまり、複合過去には客観的な事柄全体を現在の認識の中にまとめる働きがあり、そこに複合過去の主観性がある。

¹²⁾ 「ひょいとした拍子で、王子さまのいったことから、すこしずつ、ことがはぐれて、しまい、やっと、いろいろなことがわかってきたというありさまです。」(「星の王子さま」内藤濯訳 (岩波書店), p.20)

¹³⁾ 春木 (2003) 「しかし、複合過去が話し手の現在との関連において過去の事態を把握して述べる、換言すれば過去の事態を主観的に把握して述べるために使われるのであるのなら、経験や継続という形は優れて主観的な視点からの事態の表し方であり、だからこそ複合過去で述べられるのだと言える。」(p.25)

¹⁴⁾ 1999年3月から4月にバリオペラ座で上演されたバレエ作品の解説書から引用

4 おわりに

複合過去は前文脈において単純過去形で示された事実に関連する事行の完了を表す。単純過去が、一回、一回、単独で事実を表すだけであるのに対して、複合過去形はその事実にもとづく事行を出来事展開の時間に設定しなおす。その意味効果として出来事の展開に変化が表されることもあり、既に述べた事柄のまとめ、再確認、達成感などのニュアンスが生じる。このような意味効果は、時間の流れに沿って淡々と成立していく他の事行とは異なるある種の「際立ち」を複合過去形の表す事行に与える。このような認識の仕方に複合過去の主観性があると考え、今後も上で述べた仮説の妥当性を検討していくつもりである。

[参考文献]

- 春木仁孝 (1993) : 「時制・アスペクト・モダリティー」, 『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, pp.33-44
- 春木仁孝 (2002) : 「フランス語の複合過去 ―発話時の関係の類型化にむけて―」, 『言語における主観性をめぐって』, (言語文化共同研究プロジェクト 2001), (大阪大学言語文化部・言語文化研究科), pp.33-44
- 春木仁孝 (2005) : 『現代フランス語のテンス・アスペクト体系と事行の主観的認識との関係についての研究』, (大阪大学言語文化部・言語文化研究科), pp.25-32
- BENVENISTE, E. (1966) : *Problèmes de linguistique générale*, 1. Paris : Gallimard
- IMBS, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*. Paris : Klincksieck.
- TOURATIER, C. (1996) : *Le système verbal français*. Paris : Armand Colin
- WILMET, M. (1997) : *Grammaire critique du Français*. Louvain-la-Neuve : Duculot
- VASSANT, A. (1977) : (*Passé simple et passé composé en français contemporain, problématique et méthodologies*), Thèse pour le doctorat de troisième cycle, Université de Paris-Sorbonne, Paris IV